

『コリヤード^{さんげろく}懺悔録』ポルトガル語全訳注

—1990年に採択された「ポルトガル語正字法協定」(新正字法)の概要,ならびにそれに対する若干の異見—

Tradução integral portuguesa da obra *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria do frade dominicano Frei Diego Colhado: Uma pequena introdução ao Acordo Ortográfico da Língua Portuguesa assinado em 1990 e umas opiniões pessoais relativas às alterações gráficas causadas pelo dito Acordo.

日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

1990年12月16日,リスボアにおいて,「ポルトガル語に関する正字法協定」(Acordo Ortográfico da Língua Portuguesa)と題する公文書の調印が行なわれた。ポルトガルからは Academia das Ciências de Lisboa, ブラジルからは Academia Brasileira de Letras の各代表,さらに,アフリカの旧植民地からは,アンゴラ(Angola),カーボ・ヴェルデ(Cabo Verde),ギネ=ビサウ(Guiné-Bissau),モザンビーク(Moçambique)と,サン・トメ・イ・プリンシペ(São Tomé e Príncipe)の各代表が調印に参加,インドネシアから分離独立した東ティモール(Timor-Leste)も,後日,協定に調印した。サンティアゴ巡礼で知られるガリシア地方(Galiza)の言語は,いわゆるイスパニア語より以上にポルトガル語との近縁関係にあるのだが,ガリシア州政府の代表もこの式典にオブザーヴァーとして出席,協定を承認した。

ポルトガル語を公用語とする国々——特にポルトガルとブラジル——のあいだには,語彙の綴りや,熟語におけるハイフンの使用に関し,僅かな差異が存在する(より重要で本質的な文法上の差異について言えば,ポルトガルとブラジルのあいだに何ら差異は存在しない。よって,“ブラジル語”なるものの存在は断じてあり得ない)。これをできる限り統一し,規範として従うべき新正字法が上記の協定によって提示されたのである。協定は,2009年5月13日に発効,2014年12月現在,新旧双方の正字法を併存させるという移行期間が継続中なのだが,それも2015年に終了する。

ラテン文字の日本語で記された『コリヤード 懺悔録』のポルトガル全訳,ポルトガル語で記したその脚注,日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』に見える関連個所のポルトガル語訳,さらには,キリシタン史家高瀬弘一郎教授の論考3点のポルトガル語訳……と,拙作の中核で用いる言語はポルトガル語である。それゆえ,2015年に最終施行される新正字法に対する訳者

の個人的態度を、この機会を利用し、具体的な例を引きつつ以下に略述しておく必要を認める。

国営放送なのか公共放送なのかその正式な位置づけは知らないが、Rádio e Televisão de Portugal (RTP) というポルトガルを代表する放送局がある。ポルトガルへゆくとびホテルで Bom Dia, Portugal という RTP の朝のニュース番組を見る。8 時 30 分頃から、3 分ほどの枠をとり、Bom Português というコーナーが流される。街に出たレポーターが、ふたつの綴りが従来認められていたひとつの単語なり熟語について、どちらの綴りが正しいとされるか、一般市民にインタビューし答えを訊くというコーナーである。たまたまチャンネルを合わせていればしっかり傾聴するのだが、ただ、いつも少々気になるのは、レポーターの質問の仕方が必ず、新正字法に従って「正しい」のはどちらか、というものであることだ。ポルトガル政府が一種の国策として、正字法協定に定められた Nova Ortografia——新しい綴り方——を普及させようとする意向を汲みこんでの企画なのであろう。

それはさておき、この Acordo Ortográfico によって定められた新しい綴りの方向性は、何より綴りを、現実に行なわれている発音へ極力近づけ、その際、それぞれの語彙がよってきたる語源なり成り立ちを示す痕跡を綴りの中に留める、という営みは敢えて犠牲にする、というものである。そのことは、私ども外国人学習者にも一目瞭然だ。

ポルトガル語のある語彙が、①ポルトガル語の祖語であるラテン語においてどんな形であったかを知り、②ラテン語から引き継いだ綴り上の痕跡を、ポルトガル語の綴りにできる限り反映させる、などという学術的な(!)営みより、とにかく、現実に行なわれている発音により強く寄り添う綴りを公的に規則化し、その綴りを普及させるという、新正字法の制定はそんな思惑にもとづく言語政策の一環なのであろう。

ひとつ例を挙げる。

英語の action に相当する語彙として、ポルトガルでは *acção*、ブラジルでは *ação* という語形が用いられる。この語彙のラテン語の祖形は *actione* であるから、c を残すポルトガル式綴りのほうが、ラテン語の祖形により忠実であるということになる。ところがこの c、ブラジルはもとより、ポルトガルでも発音されず、アサウン(ゴチックの箇所は鼻音化する)に近く発音することに変わりはない。だからこの際、発音されない c が綴りの中にもともと存在しないブラジル式へ、両国の綴りを統一してしまおう、という立場を、新正字法は採る。

ここでは必然的に、ラテン語の祖形からの——綴りのうえの——歴史的連続性の明示という所為は等閑に付されるわけで、特にポルトガルの伝統主義を重んずる文筆家の一部から、新正字法に対する強硬な反対論が沸き起こったのも当然、という気がする。

譬えに無理があることは承知のうえだが、ゲイジュツのゲイを「藝」と書いてはならない、これからは「芸」だけに限る、と宣告されるようなものである。オコナウはあすから、行う、に一本化せ

よ、行なう、は不可、などと、ある筋から通告されるようなもの、と言ってもよい。梅棹忠夫あたりから薫陶を受けた役人が、あす以降、訓読みの漢字表記を一律的にやめ、考える、を、かんがえる、としか表記してはならぬ、など言い越してきたら、どうであろう(ちなみに梅棹は、日本語ワードプロセッサの出現によって、漢字仮名交じりという日本語文章の特長が難なく守れるようになってのちも、日本語をローマ字で表記したいとする旧来の持論をおおやけには撤回しなかったようだし、そんな愚論が破綻したあとも、訓読みの漢字はせめて平仮名で表記する、という信念を生涯貫いていた。気の利いた幼稚園児にさえ読めるような漢字が、訓読みであるというだけで一律的機械的に平仮名表記されているから、もたもたして、わかりづらかった)。

畜類を食肉処理する屠畜を「と畜」と記す筆者を見たことがある。「と」にわざわざ傍点を振ってあることもある。どういう神経なのか、どちらにしても実に見苦しい表記だ。屠殺という語彙の最初の漢字を一部の人が忌避するというただそれだけの理由で、上記のようなみっともない“混ぜ書き”を全般に強制されてはかなわない。ルビはこういうときのために存在するのだ。

近頃すっかり定着してしまった感のある「障がい者」という“混ぜ書き”もちょっとひどくはないか。「害」という漢字をノホホンと「がい」という平仮名に開いたところで、現実の障害者(私は、障害者、を用いる。とにかく“混ぜ書き”が厭なのだ)を取り巻く状況が改善されるわけでもあるまいに。

こうした安易な言い換え(というか、この場合は一種の伏せ字、と評してもよい)を繰り返しておりさえすれば、差別だの偏見だのが自然に消滅し事態は自然に改善へ向かうと思ひ込んでいる「頭の不自由なひと」には、毎度のことながら降参するしかない。

どれもこれも私にとっては悪夢のような話だが、ともかく、書き手の意思にそぐわぬ、表記の人工的一本化を、権威らつかせて迫るのは、いかなる言葉の世界にあってもやめて欲しいものだ。

雑談はほどほどにしてポルトガル語新正字法へ戻る。あっさり結論から述べてしまえば、一外国人学習者が“内政干渉”じみた御託を縷々並べているところから想像してもらえたとおり、まもなく全面施行されようとしているこの新正字法に、私は全面的には従わない。

以下、新正字法の概要を記す。

それとともに、ポルトガル語学習者のひとりである私なりの意見なりコメントを簡略に附記する(新正字法の概要はフォントサイズ10の文字で記し、同9で記す日塾個人のコメントなり意見と区別する)。意見なりコメントを支える私なりの論拠もしくは主張は * を附しより小さな文字で適宜記すし、それが説得的であるよう望みはするものの、個々の事例において、旧正字法を守るか、新正字法でよとするか、それを決めるのは、多くの場合、己の感性というか、もっとはっきり言えば好みである(そしてそれでいいと考える)、と告白しておかねばならない。ところが困ったことに、その好みは、新正字法からの“お達し”とはしばしば対立する。

新正字法の概要を6つの分野に分けて示すと下記の如くなる。

- A. アルファベットに正式に加わる文字(Alfabeto)
- B. 発音されない子音の扱いに関する決まり(Consoantes não pronunciadas)
- C. アクセント記号削除に関する決まり(Eliminação do acento gráfico)
- D. ブラジル限定のアクセント記号削除に関する決まり(Eliminação do acento gráfico exclusivamente no Brasil)
- E. ハイフン使用に関する決まり(Hifen)
- F. 大文字・小文字の使用に関する決まり(Maiúsculas e minúsculas)



以下 A～F の項目に関する各論に入る。

A. アルファベットに正式に加わる文字

- A-1. 従来のポルトガル語では特殊なケースにしか用いられてこなかった 3 つの文字 **k**, **w**, **y**(下線を施す)を, そのアルファベットに〈公式に〉編入, ポルトガル語のアルファベットは26の文字によって構成されることになる。

a A(á) b B(bê) c C(cê) d D(dê) e E(é) f F(efê) g G(gê ou guê) h H(agá) i I
 (i) j J(jota) k K(capa) l L(ele) m M(eme) n N(ene) o O(ó) p P(pê) q Q(quê)
 r R(ere) s S(esse) t T(tê) u U(u) v V(vê) w W(dáblio ou duplo vê) x X(xis) y
Y(ípsilon ou i grego) z Z(zê)

- A-2. **k**, **w**, **y** は, 次の場合に用いる。

- A-2-1. 外国語に由来する人名 (antropónimos de origem estrangeira) およびその派生語として

Kant, kantiano

Weber, weberiano

Yang, yanguiano など

- A-2-2. 外国語に由来する地名 (topónimos de origem estrangeira) およびその派生語として

Kowait, kowaitiano

Washington, washingtoniano

Yorkshire, yorkshiriano など

* 2011 年夏, 本学生徒 3 名のほか畏友尾河直哉氏(フランス文藝評論)が UBI (バイラ・インテリオール大学。本学がヨーロッパに唯一有する交流協定校)で開催される外国人のためのポルトガル語集中講座に参加した。引率と指導にあたるため私は彼ら(彼女ら)と行旅をともにした。コヴィリャン入りする前の一日をリスボア見物に費やしたところ, ある女子生徒が市街をひと巡りした印象として, **K** の文字がほとんど目に入らない, と私に語った。ポルトガル語の予備知識はなく, 正直なところ学力に不安のある

女子であったが、この直観力には感心した。彼女によると、リスボア街歩きで目に入った K の文字は、Hard Rock Café の k だけだったとか。

ポルトガル語では東京を Tóquio(トキオ——ゴチックに強勢アクセント)と綴り、これはすでにポルトガル語そのものと言ってよい。k をなるべく排除するという立場から Tóquio という綴りから ki を取り去りそれを qui に替えるわけだ。では、知名度においてこれより低い都市の名にはどう対処するか。一考を要する。

k, w, y の文字を含む地名に関しては、可能な限りポルトガル語風の語形に置き換えるよう新正字法は求める。たとえば Nova Iorque(New York)のように。日本の地名では、たとえば Nagasaki は、上述の原則を守ると Nagasaqui となる。ただ日本の地理を知らないポルトガル人にこれを読ませるとまず100パーセント「ナガザキ」と発音する。そのたびに私など、ザではなくてそこは ç(セー・セディーリャにアー)などと、つい言わずもがなのお節介を焼いてしまう。日本イエズス会版『羅葡日対訳辞書』(1595年、天草刊)というキリシタン版の傑作には、扉に、刊行地 Amacusa の文字が見え、これはキリシタン資料におけるポルトガル語式ラテン文字の読みのルール(清音の「サ」は sa とし、濁音の「ザ」には za を宛てる)に従い「アマクサ」と発音する。あるときポルトガルの高名な学者が、ポルトガル語発音の通常ルールにもとづき「アマクザ」と発音するのを聞いたので、あまりの語感の悪さに思わず訂正を願い出たことがある。発音と綴りのできる限りの一致を新正字法は謳うわけだから、Nagaçaqui や Amacuça というような綴りも承認されてよいと思う。

ポルトガル語風の綴りうんぬんと言っても、横浜を Iocoama(ha をハと発音させることをハナから諦めているのだらう)と綴る教科書を見たことがあるのだが、ここまで原音を壊されると何とかしてくれという気分にもなる。

そのほかポルトガル語として確立している外国地名の表記に関して、新正字法は、原綴りよりポルトガル語的な表記を優先することが望ましい、とする。たとえば Genève に代えて Genebra へ、Zürich に代えて Zurique へ、のように。Londres(London)や、上記 Nova Iorque(New York)などは完全にポルトガル語そのものと言ってよい。

A-2-3. 略号(siglas)として

WC

WAP(wireless application protocol)など

A-2-4. 略号(símbolos)として

km(kilómetro)など

A-2-5. 秤量の国際的単位(unidades de medida internacionais)として

watt など

A-2-6. 外国語由来の常用語(palavras correntes de origem estrangeira)として

kart

workshop

yoga など

A-3. 外国人の固有名詞からの派生語に関しては、たとえそれらがポルトガル語新正字法の表記と不調和を来すものであっても、もともとの綴りの痕跡やトレーマ(ü)をそのまま残す。

garrettiano (Garrett より)

mülleriano (Müller より)

shakespeariano (Shakespeare より) など

* これは派生語ではなく人名そのものだが、日本キリシタン史に最も重要な足跡を遺したアレッサンドロ・ヴァリニャーノというイタリア人イエズス会宣教師がいる。彼の姓については、ポルトガル語で書かれる論文でも当然、オリジナルのイタリア式綴りを重んじ **Valignano** と記す(拙作に収める高瀬弘一郎論文のポルトガル語訳 3 点など参照)。では、ほかならぬ拙作で、その主人公というべきスペイン人ドミニコ会士ディエゴ・コリヤードの「コリヤード」をポルトガル語式に **Colhado** と綴るのはどうしたことか、という批判が出るであろう。それに対する答えは次のとおり。

まず何より、ヴァリニャーノとコリヤードとでは、知名度に格段の差がある。学術書に記された **Valignano** など知識人であれば誰でも正しく読めるのに対し、カステイーリャ語の **Collado** という綴りを示して正しくコリヤードと発音してくれるポルトガル人は、残念ながらあまり多くない。広くポルトガルの読書人にコリヤードの作品をポルトガル語で読んで欲しいと願う訳者の立場からすると、原著者の名がポルトガル人によってコレードなどと発音されるのは厭である。ポルトガル語風に **Colhado** と綴りさえすれば、その些細な誤りを回避することができる。カステイーリャ語原綴り **Collado** の下線部をそうして誤りなく発音してもらうよう期するわけだが、だからとて、オリジナルの **Diego** をポルトガル語風の **Diogo** へ置き換えるようなことはしない。

A-4. 可能であればなるべく、k は c へ置き換え(例, kayak は caiaque へ), k が e や i の前ならポルトガル語本来の qu へ置き換える(例, joker は jóquer へ)ことが、望ましい。同様に、w は u へ置き換え(例, whisky は uísque へ), あるいは v へ置き換える(例, kiwi は quivi へ)ことが、これまた推奨され、y は i へ置き換え(例, yoga は ioga へ), あるいは、ときにより、j へ置き換える(例, yard は jarda へ)ことが、勧められる。

* 外国語の表記に関する新正字法の決まりであるが、一応これで差し支えあるまい。ただ、原語から受ける印象と、ポルトガル語風へ直した綴りから受ける印象とが、あまりにも異なりすぎるのは、如何なものかとは思ふ。y を i へ置き換えるに際しては、日本の通貨(yen)の表記が問題となるが、ポルトガル語では *ienes* (*iene* の複数、ほぼすべてのケースで複数形を使うことになろう)が問題なく定着しているようだ。

B. 発音されない子音の扱いに関する決まり

B-1. 一定の子音のシークエンス(*sequência*)の中では発音されない、もうの子音を綴りから省く。

B-1-1. 一定の子音のシークエンスの中で、発音されない *c* もしくは *p* が存在するとき、新正字法は、その *c* もしくは *p* が綴りから脱落することを「見越している」(*prevê*)。ただし他方、当該の *c* および *p* が発音されたり発音されなかつたり、と発音の“揺れ”が存在するケースにあつては、2 通りの綴りが許容されることもある、とする。双方に関する例は下記のとおり。

B-1-1-1. *cc* から *c* へ *accionar* > *açionar*

* 新正字法では *acionar* だけが許容されるとする。重なった *cc* の最初の *c* は発音されないから、というのがその理由である。が個人的には、まだ *acionar* なり *ação* という語形に未練がある。編集権の強制を受けない限りみずからの文章から捨て去るつもりはない。たとえば「哲学」の綴りが、侃々諤々の議論を経つつ *philosophia* から *filosofia* へ移行し、あるいは、「損害」の綴りが、*damno* から *dano* へ移行し(ただし *dano* へ移行した後も、旧綴りの *m* によって明示されていた鼻音化現象は維持されているし、維持するのが美しい発音と見なされる)、それぞれ前者の *philosophia* と *damno* が自然消滅したように、*acionar* なり *ação* も、*cc* (*cc*) シークエンスの最初の *c* ——発音されない、もうの *c* ——が消えてなくなるほうがいいというなら、その自然消滅を気長に待てばいいではないか。

direccional > *direcional*

* 上掲のコメントに準ずる。

leccionar > *lecionar*

* 前述のポルトガルを代表する放送局 RTP が編集し、辞書編纂で定評のある *Porto Editora* が刊行したマニュアル本 *Acordo Ortográfico. Bom Português* によると、この動詞については双方の綴りが許容される、とする。つまり、*cc* > *c* という一律的かつ機械的な変換は必ずしも起こるとは限らぬことを、新正字法も認めている。ところが同じ *Porto*

Editora の刊行した *Dicionário da Língua Portuguesa* 最新版(2014)の増補ページによると、ここに記したとおり、新正字法で正しいと認めるのは *lecionar* だという。このように、参考にする文献や辞書により、見解の相違は存在し、新正字法を尊重しようとする論者の編んだ著書間においてさえ、個別具体的な語彙に立ち入れれば、完璧な見解統一など、依然実現していないのだ。

重なる *cc* の最初の *c* を軽く、*q* と発音するため、私個人としては、編集権の強い干渉を受けなければ、綴りも *cc* のまま据え置く。これはもう語感もしくは好みの問題というしかないのだが、永年愛着を持って用いてきた *cc* のシークエンス——ポルトガルのポルトガル語式であるとともに、こちらこそがラテン語の祖形をより忠実に継承するもの——を基本的には放棄しない。

B-1-1-2. *çç* から *ç* へ *accção* > *ação*

coleccção > *colecção*

seleccção > *selecção*

direccção > *direcção*

* B-1-1-1 に対するコメントに準ずる。

B-1-1-3. *ct* から *t* へ *colectivo* > *coletivo*

dialecto > *dialeto*

electricidade > *eletricidade*

eléctrico > *elétrico*

* B-1-1-1 に対するコメントに準ずる。

B-1-1-4. *pc* から *c* へ *adopcionismo* > *adoçionismo*

excepcional > *exceçional*

recepçionista > *rececionista*

B-1-1-5. *pçç* から *ç* へ *adopção* > *adoção*

perempção > *perença* (旧正字法から新正字法への移行にあたり綴り上の操作が必要となる。mpç > nç)

recepção > *receção*

* *pc* > *c* にせよ、*pç* > *ç* にせよ、新正字法は、*p* を省くよう求めているのだが、個人としては従わない。あまりにも語彙の相貌が変わりすぎるからという、私的な感性に由来する、主観的と言われれば、そのとおり、と答えるしかない、理由にもならぬ理由からであるが、「養子縁組」を意味する *adopção* にせよ神学用語である *adopcionismo* (キリストをデウスの子とするのではなくその養子とする異端の説) にせよ *p* を切り落とすと、

語彙の視覚的印象が変わりすぎるではないか。ホテルの受付も RECEÇÃO と、P を落とさせるつもりなのか。そもそもこの p は発音していいと思うし、むしろそうすることがラテン語の祖形により忠実な態度である。ともかく原則として、この改変には従わない。

さきほど、語彙の視覚的印象、という言葉を用いた。文字理解のための視覚的効果など日本語のように表意文字を用いる言語についてのみ妥当する、という反論が出るであろう。

ポルトガル語では他のロマンス語のほぼすべてと同様、h は綴りにあっても発音されることはない。ラテン語で発音されポルトガル語で発音されない h を、発音されぬという理由ですべて除去したりすれば、当該語彙の視覚的印象へ及ぼす影響は計り知れないであろう。発音されない文字を綴りから除去することがその基本原則だという新正字法が、h の全面的除去などという愚挙に踏み込んでいないのは、それによって引き起こされる語彙の視覚的印象の混乱、という事情を多少は考慮したからではあるまいか。ともかく今後、より急進的な(?)が論客が出現し、発音されない h の全廃など言い出したらどうしようかと、冗談でも何でもなく、心配でならぬ(ちなみに、1500年カブラル船隊がブラジルへ到達したとき、書記官ペロ・ヴァス・デ・カミーニャが停泊地からマヌエル王宛てしたためた書翰には、h を取り去った語彙の用例が相当数見え—— oje, ospedes, ouemos, etc. ——、特にアルカイック期や近世初期のポルトガル語にあって発音されぬ h の除去は、別段“禁じ手”ではなかった)。

前掲 *Acordo Ortográfico. Bom Português* は、個別の語彙より熟語ごとに、一問一答の形式で記述が進められる。「キヅタ」という植物を意味する *hera* という語彙については、h を削るのが正しいか、保つのが正しいのか、と問い、正しい答えは *hera* である、と答える。植物学者しか使わぬような語彙であり、さしあたり訳者とは関係ないが、*critério etimológico* (語源学的観点)を犠牲にしても、実際の発音に綴りを合わせることを重んずる新正字法にあって、この語彙に関しては、ことさらにラテン語の語源からの「力」(*força*)を強調しているのだ。もともと *hera* は、*era* (動詞 *ser* の直説法・不完全過去・一人称/三人称単数)と発音が同一であり紛らわしいから、そうして h を残しておくだけ、と言えばそれまでのことだが。

B-1-1-6. pt から t へ *óptimo* > *ótimo*

peremptório > *perentório* (旧正字法から新正字法への移行にあたり綴

り上の操作が必要となる。mpt > nt)

* pt の子音シークエンスにおいて p を残存させるのが(その p が発音されてもされ

なくても)、従来一般的には、ポルトガル式であるとされ、*ótimo* もそうであると、新正字法を意識して編纂された白水社版『現代ポルトガル語辞典 三訂版 和ポ付』(池上岑夫/金七紀男/高橋都彦/富野幹雄/武田千香共編, 2014年)は教える。が、困ったことに、RTP 編 *Acordo Ortográfico: Bom Português* (Porto Editora, s/d) にはそれとは食い違うことが記されている。すなわち新正字法ではいずれの綴りも「正しい」が、*p* を発音せぬポルトガルにおける綴りは *ótimo* だというのだ(p.111)。

Dicionário da Língua Portuguesa 最新版に附された *Acordo Ortográfico* に関する簡単なマニュアルには、*pt* および *ct* という子音のシークエンスに際し、*p* および *c* が発音されるときは、綴りにも *p* および *c* は保持される、として *captura* や *pacto* の例を挙げる。

規則 B-1-1-5 と関わることであるが、*pc* という子音のシークエンスに際し、*p* が発音されるときは、綴りにも *p* は保持される、その例として、日埜は *corupção* や *interrupção* を挙げる。ポルトガルでは、これらの語彙の *p* は現に発音されるし、綴り上も *p* は維持されている。

ちょっと余談。*corupção* については印象的な思い出がある。開催国ブラジルがベスト 4 という文字どおりの惨敗に終わった 2014 年のワールドカップの開催直前、ほかならぬブラジル国民のあいだでこのワールドカップに反対するデモが各地で行なわれた。そのひとつで見たプラカードには *Não somos contra a Seleção mas contra a corrupção*。(我らはセレサウン[ブラジル代表。セレソンにあらず]に反対なのではない。コルプサウン[腐った連中の腐ったやり方]に反対なだけ——ゴチックの箇所で韻を踏んでいる)と、確かに書いてあった。ブラジル人も *corupção* の *p* を発音するのであろう。

仮に *p* を切り落とすと、視覚的にもこの語彙の正体を捉えるのに、少なくとも一瞬は戸惑いを覚えるであろう。それは個人の感性、ひとりよがりの感想、と言われれば、そのとおり、と開き直るしかないが、一面の合理性を有する旧来の綴りを、新しい綴りとせめて併存させること程度が、なぜよろしくないのか、私は理解しかねる。それにそもそも、上述の規則がまったく機械的に実行へ移し得ないことは、新正字法も認めるところである。そこで次の規則 B-2 の出番となる。

B-2. ある種の子音のシークエンスの中で、発音の“揺れ”(oscilação)が存在する場合、最初の子音が脱落したり脱落しなかったりする。

B-2-1. 下記のもろもろの例は、子音のシークエンスの中で、最初の子音が発音されることもあり、発音されないこともある、つまり発音の“揺れ”が存在する、というケ

ースだ。つまり最初の子音を落とさぬ綴りと、落とす綴りの両方が可能、ということである。

B-2-1-1. cc でも c でもよい perfeccionista/perfeccionista

B-2-1-2. cç でも ç でもよい intersecção/intersecção

objecção/objeção

* cç の子音シークエンスにおいて c を残存させるのが(その c が発音されてもされなくても)、従来一般的には、ポルトガル式であるとされ、objecção もそうであると、新正字法を意識して編纂された前掲『現代ポルトガル語辞典 三訂版 和ポ付』は教える。が、またもや困ったことに、RTP 編 *Acordo Ortográfico: Bom Português* (Porto Editora, s/d) にはそれとは齟齬することが記されている。すなわち新正字法ではいずれの綴りも「正しい」が、c を発音せぬポルトガルにおける綴りは objeção だというのだ (p.107)。

intersecção/ intersecção については、c を発音するなら intersecção とし、c を発音しないなら intersecção とし、双方の綴りを許容する、というのだが、こんなややこしい定めをこしらえるくらいなら、初手から無用の綴りいじりはすべきではなかった、というのが私の偽らざる感想である。

規則 B-1-1-2 に属する例だが、たとえ acção の c が発音されなくとも、acção という綴りはこれをそのまま保持し(むしろ acção と綴ることはそれぞれの記者の勝手であり、私はこれにいきさかも容喙しない)、発音だけはきちんとアサウン(ゴチックの箇所は鼻音化する)とすればよい、という方法——従来のポルトガル式——を保持すればよいのではないか、というのが個人としての率直な感想である。

B-2-1-3. ct でも t でもよい sector/ setor

característica/ característica

expectativa/ expetativa

* 個人的には躊躇なく c を残す綴りを採る。

B-2-1-4. pç でも ç でもよい consumpção/consunção (旧正字法から新正字法への移行にあ

たり綴り上の操作が必要となる。mpç > nç)

* 個人的には躊躇なく p を残す綴りを採る。

B-2-1-5. pt でも t でもよい interruptor/ interrutor

conceptual/ conceitual

* 双方の綴りの併存を認めるとする上記 5 種の語彙グループのうち、特に旧正字法を守りたいのは後 2 者、すなわち B-2-1-4 と B-2-1-5 のグループである。いずれも p がなければ一瞬可の語彙なのかわからなくなる。妨害を表わす interrupção など p を削つ

てどう理解せよというのか。幸い、発音される、という理由で、このグループの語彙に見える p は保存されるのだが、派生語というべき *interruptor* に関しては p という子音の発音に“揺れ”(oscilação)あり、として *interrutor* との併存を認めるのだそう。p を落とした *interrutor* など御免蒙りたいが、ともかく、妙な権威をちらつかせての煩雑な文字いじりはよせ、と言いたい。事態をかえって混乱に陥れるだけではないか。

識者がそれぞれの見識に依拠し、伝統の保守と、現実との妥協を巧みに擦りあわせつつ己が最良と考える正字法を追求すればよいのだ。

C. アクセント記号に関する決まり(Acento gráfico)

C-1. アクセント記号を省くのは次のようなケースである。

C-1-1. *palavras graves* [最後から数えてふたつめの音節にアクセントを置く語彙]で、それに二重母音 *ói*——開口の強勢アクセントあり——が含まれるとき、そのアクセント記号を省く。

bóia > *boia*

jóia > *joia*

* 後述の規則 D-1-1 により、ブラジルのポルトガル語から、類似ケースのアクセント記号が消えることになったから、それとの整合性に鑑みれば、本項の規則には妥当性ありとすることができる。ただしアクセント記号が消えた以上、二重母音 *oi* に開口の強勢アクセントが置かれることは、綴りからは判明しなくなり記憶するしかなくなった。

C-1-2. 動詞の活用形で *-êem* をもって終わるものは、そのアクセント記号を省く。

dêem > *deem* (*dar* の接続法・現在・三人称複数)

crêem > *creem* (*crer* の直説法・現在・三人称複数)

vêem > *veem* (*ver* の直説法・現在・三人称複数)

lêem > *leem* (*ler* の直説法・現在・三人称複数)など

* これらの活用のありさまは、1970 年代半ば、その暗記にいそしんだわが脳味噌にそれこそ“映像的”に定着してしまっており、いまさら“山型”のアクセント・シルクンフレクソを除けと言われても……と困惑するばかりだ。

愚痴はこれくらいとして、このアクセント記号には、ê が閉口音であることを示すという積極的な役割もある。開口音・閉口音の区別は、あたかもキリシタン時代の日本語に存在した開音・合音の区別の如く、ポルトガル語発音の難しさのひとつと言ってよいが、アクセント・シルクンフレクソを残すことは、綴りを発音に極力寄り添わせる、という新正字法の狙いにも叶うと思う。ともかく新正字法の指示には従わない(*dar* の直説法・完全過去・

一人称複数では *dêmos* と *demos* の双方を認めるというのだから、上記の 4 例だってどちらでもいいではないか。上述のとおり、アセント・シルクンフレクソには、第一音節の *e* を閉口音と認識させる積極的な意義もあるのだし。

C-1-3. *palavras graves* 同士で、綴りが同一であり語義が異なる場合、開口アクセントであれ閉口音アクセントであれそのアクセント記号を省く。

C-1-3-1. *para* /á/(*parar*の直説法・現在・三人称単数もしくは命令法。閉口音のアクセントあり)と、前置詞 *para* とは、綴り上の区別をなくし、どちらにもアクセント記号をつけない。

* 動詞 *parar* の活用形である *para* と、前置詞の *para* が混同する可能性は少ないから、これでよからう。

C-1-3-2. *pelo* /é/(*pelar*の直説法・現在・一人称単数。閉口音のアクセントあり)と、*pelo* /ê/(名詞。閉口音のアクセントあり)と、*pelo*(前置詞 *por* と定冠詞 *o* の縮合形)とは、綴り上の区別をなくし、いずれにもアクセント記号をつけない。

* 動詞、名詞、前置詞と、綴りは同じでも、品詞は異なり、混同する可能性は少ないから、これでよからう。

C-1-3-4. *pela* /é/(*pelar* の直説法・現在・三人称単数にして命令法。閉口音のアクセントあり)と、*pela* /ê/(名詞。閉口音のアクセントあり)と、*pela*(前置詞 *por* と定冠詞 *a* の縮合形)とは、綴り上の区別をなくし、いずれにもアクセント記号をつけない。

* 動詞、名詞、前置詞と、綴りは同じでも、品詞は異なり、混同する可能性は少ないから、これでよからう。

C-1-3-5. *polo* /ó/(名詞。閉口音のアクセントあり)と、*polo*(前置詞 *por* と定冠詞 *o* の古い縮合形)とは、綴り上の区別をなくし、いずれにもアクセント記号をつけない。

* これも混同する可能性の少ない組み合わせではあるが、古い史料の中には縮合形 *polo* が頻繁に現われる。紛らわしさを防ぐため、やはり名詞のほうは *pólo* のまま据え置きたい。

C-1-3-6. *pera* /ê/(名詞。閉口音のアクセントあり)と、*pera*(前置詞 *para* の古形)とは、綴り上の区別をなくし、いずれにもアクセント記号をつけない。

* 上記の名詞と前置詞とが混同する可能性は少ないから、これでよからう。

C-1-3-7. *pero* /ê/(名詞。閉口音のアクセントあり)と、*pero*(古形の接続詞)とは、綴り上の区別をなくし、いずれにもアクセント記号をつけない。

* 上記の名詞と接続詞とが混同することはなかろうから、これでよからう。

C-1-3-8. *-amos* で終わる直説法完全過去形(一人称複数)は、*passámos* (*falámos*, etc)でも *passamos* (*falamos*, etc)でもよい。

* 開口の強勢アクセント記号を附すのがポルトガル式、附さないのがブラジル式と、一般的には区別されている。完全過去形であることがアクセント記号により一目瞭然でわかるポルトガル式のほうが私には好ましいので、これを使い続ける。

C-1-4. 動詞 *arguir* および *redarguir* に関しては、直説法現在形に現われる *ú* から、そのアクセント記号を省く。

argúis, argúi, argúem > arguis, argui, arguem

* *arguis, argui, arguem* は *palavras graves* であるから *u* に強勢アクセント記号を振ることは不要である、という考えなのであろう。しかしこれらとて、アルギス、アルギ、アルゲンと発音させず、近似音アルグイス・アルグィ・アルグエン(ゴチックに強勢アクセント)と発音させるため、少なくとも私ども外国人学習者にとり、旧正字法のアセント・アグードはまことに有用であった。ともかく新正字法により、綴りから発音を推測する途は断たれ、上記の如くその発音は暗記するしかなくなった。

redargúis, redargúi, redargúem > redarguis, redargui, redarguem

* 上記のコメントに準ずる。

C-1-5. *-guar, -quar, -quir* で終わる動詞の活用形に関しては、かつてアクセント記号の振られていた語形に現われる *ú* から、そのアクセント記号を取り去る。

averigúe, averigúes, averigúem > averigue, averigues, averiguem

* *averigue, averigues, averiguem* は *palavras graves* であるから *u* に強勢アクセント記号を振ることは不要である、という考えなのであろう。しかしこれらとて、アヴェリゲ、アヴェリゲス、アヴェリゲンと発音させず、近似音アヴェリグェ・アヴェリグェス・アヴェリグエン(ゴチックに強勢アクセント)と発音させるため、少なくとも私ども外国人学習者にとり、旧正字法のアセント・アグードは確実に有用であった。新正字法により、綴りから発音を推測する途は断たれ、上記の如くその発音は暗記するしかなくなった。

C-1-4 および C-1-5 に関しては、新正字法に従ってもよいが、本心を言えば旧正字法を維持したいから、万が一この動詞を己の葡作文で使用せざるを得なくなったら、逃げの一手、他の類義語を探してそれを使うだろう。

D. ブラジル限定のアクセント記号削除に関する決まり (*Eliminação do acento gráfico exclusivamente no Brasil*)

D-1. 下記の改変——アクセント記号削除——はブラジルのポルトガル語でのみ行なわれる(ポルトガルのポルトガル語では、D-1-1 から D-1-4 までに見えるアクセント記号は、もともと行な

われていない)。

- D-1-1. *palavras graves* [最後から数えてふたつめの音節にアクセントを置く語彙]で、それに二重母音 *éi*——開口の強勢アクセントあり——が含まれるとき、そのアクセント記号を省く。

assembléia > *assembleia*

idéia > *ideia*

- D-1-2. *palavras graves* で、強勢アクセントのある母音 *i* または *u* が含まれ、その *i* または *u* の直前に二重母音があるとき、そのアクセント記号を省く。

baiúca > *baiuca*

feiúra > *feiuura*

- D-1-3. *palavras graves* で、語尾が *-oo* であるとき、そのアクセント記号を省く。

enjôo > *enjoo*

vôo > *voo*

- D-1-4. トレーマ (*ü*) は全廃する (ただし、外国語起源の語彙とその派生語におけるトレーマは存続する)。

lingüiça > *linguiça*

tranqüilo > *tranquilo*

cinqüenta > *cinquenta*

agüentar > *aguentar*

* ごく近年までブラジルのポルトガル語に存在した特殊記号のひとつトレーマが新正字法により完全消滅することになった (ただし、外国語起源の語彙とその派生語におけるトレーマは存続する)。トレーマは、*güi* や *güe* という綴りにより、あるいは、*qüi* や *qüe* という綴りにより、これらがそれぞれグイ、グエ(ギ、ゲではなく)、あるいは、クイ、クエ(キ、ケではなく)であることを教える、特に私ども外国人学習者にとっては、なかなか親切で便利な記号であった。このトレーマがなぜか、両国のポルトガル語から“正式に”姿を消すことになった。そのため *lingüiça* (リングイサ) のようにグイと発音するか、*áquia* (アギア) のようにギと発音するかは、個別に記憶するほかはなくなり、*agüentar* (アグエンタール) のようにグエと発音するか *guerra* (ゲーラ) のようにゲと発音するかについても、個別の記憶が必要となった。*cinqüenta* (シンクエンタ) のようにクエと発音するか、*esquecer* (エスケセール) のようにケと発音するかについて、さらには *tranqüilo* (トランクイロ) のようにクイと発音するか、*monarquía* (モナルキア) のようにキと発音するか、についても個々の記憶に頼るしか途はなくなった。

E. ハイフン使用に関する決まり(Hífen)

E-1. 下記の場合ではハイフンを使う。

E-1-1. 動物名もしくは植物名 (espécies zoológicas e botánicas) を表わす合成語はハイフンでつなぐ。

andorinha-do-mar

couve-flor

* 上記ふたつの例に関していえば、ハイフンでつなぐのが当然である。が、新正字法におけるかなり大きな問題点、と思考するのがまさにこの項目だ。動植物名の語彙で用いるハイフン以外にはあらかじめハイフンを省く、というのが新正字法の基本方針なのだが、ハイフンでつなぐ語彙が、なにゆえに動物 (corvo-marinho, bem-te-vi, urso-do-bolso, etc) と植物 (cana-de-açúcar, parece-mas-não-é, milho-zaburro, etc) とに限定されるのか、がそもそもわからない。

拙作に収める高瀬論文のうち「キリシタン布教における“適応”」の葡語訳には pé-de-altar というかなり特殊な語彙が登場する。死者を弔うミサに際し司祭へ手渡す謝礼を表わす。動植物名ではないから、新正字法によれば、ハイフンを省くことになるが、これには到底従うことができない。どう考えてもこれは pé-de-altar というひとつの熟語としてしか理解不能ではないか。cartão de visita (名刺) や fim de semana (週末) のような使用頻度の高い文字どおりの熟語とは、性格がまったく異なる。

E-1-2. いかなる接頭辞の後であれ合成語の第 2 エLEMENTが h で始まるときは、ハイフンを使う。

anti-herói

pré-história

super-homem

E-1-3. 接頭辞の終わりの母音と、第 2 エLEMENTの最初の母音とが同一であるときは、ハイフンを使う。

anti-ibérico

infra-axilar

micro-ondas

* anti- を接頭辞とする語彙については antibiótico や Anticristo などすでに一語で成熟しているものも多いように思うが、それでも anticolonialismo などハイフンでつなぐか否かの判断を個々人の嗜好なり感性に委ねるほうがよいと思うものが、少なくな

い。拙作に収める高瀬論文のうち「キリタンと統一権力」の葡語訳には, *édito anticristão* (秀吉の発したキリタン禁教令) という訳語が頻出する。新正字法のルールを墨守するなら *anticristão* とハイフンを取り去ることになるが, そうはしない。

infra- を接頭辞とする合成語を, 新旧綴りが併記された *Dicionário da Língua Portuguesa* (最新版) で試みに検してみると, 幸いその数自体があまり多くないことはさておき, 上掲の規則をいったん無視するなら, ハイフンを省かねばならないという, ことさら積極的な理由の見出しうるものはほとんどない。唯一の例外は *infraestrutura* (社会基盤, いわゆるインフラ) であり, この語彙なら独立語としてすでに成熟しているという理由で, 訳者はハイフンなしとするにやぶさかではない。これとて未成熟と考える人がいるなら, そのような人には *infra-estrutura* という綴りを従来どおり認めればいいではないか(前掲辞書は両綴りを併記)。

逆に *micro-ondas* に関しては, ハイフンを使うべしという新正字法の決まりに該当する語彙ではあるが, 繰り返し述べているとおり, 日常語彙として熟きったものであるがゆえにハイフンなしでよいと私は判断する。

E-1.4. 接頭辞の終わりの子音と, 第 2 エレメントの最初の子音とが同一であるときは, ハイフンを使う。

hiper-realista

inter-regional

super-resistente

* リスボアから UBI のあるコヴィリヤンへは, CP と呼ばれるポルトガル国鉄が *Intercidade* という直通列車を走らせている。この語彙では接頭辞 *inter-* の最後の子音 *r* と, 第 2 エレメント *cidade* の最初の子音 *c* とが異なるためハイフンは不要, と, 新正字法によれば, そういう理窟となるのだが, 私としてはハイフン不要の理由を, *Intercidade* という言葉がポルトガル人の社会生活ですでに熟していることに求める。

neoclassicismo (新古典主義) という語彙は, 新正字法によれば, ハイフンなしで綴るのが正しい。ハイフンなしの一語として熟していると考ええる人なら *neoclassicismo* とすればよからうし, *neo-* という接頭辞の意義を尊重したいとか, ハイフンなしの一語では熟成の度合いが足りないと考ええる人なら *neo-classicismo* とすればいいではないか。接頭辞を含む合成語においてハイフンを全廃したわけではないのだから, ハイフンを附することにより, 接頭辞固有の語義を際立たせる, という考え方もあってよい, と私は考える。

私としては, 接頭辞を含む合成語に関し, ハイフンなしの一語として熟していると思う

語彙はハイフンなしで、そうとは思えぬ語彙についてはハイフンつきで、という原則で処理する。とにかく煩瑣なルールをかずかず設けて、この語彙はハイフンつき、この語彙はハイフンなし、と命ずるような“お達し”を出すこと自体、官僚的形式主義の極みであり、そんな空疎なルールに唯々諾々と従うを余儀なくされる政府・公的機関のお歴々が気の毒でならぬ。

E-1-5. 合成語の接頭辞に *pós-*, *pré-*, *pró-* のような強勢アセント記号が含まれるときは、ハイフンでつなく。

pós-graduação

pré-fabricado

pró-europeu

* 当然これでよい。つまり旧正字法のまま。

E-1-6. 合成語の接頭辞が *ex-*(「前」もしくは「一時中断」を意味する)および *vice-*であるときは、ハイフンでつなく

ex-combatente

vice-presidente

* 当然これでよい。つまり旧正字法のまま。

E-1-7. 合成語の接頭辞が *circum-* または *pan-* であり、しかも、第 2 エレメントが *h*, *m*, *n*, あるいは母音で始まるときは、ハイフンでつなく。

circum-navegação

pan-africano

* 世界周航を意味する *circum-navegação* は上記のルールによってハイフンでつなくことが求められているのだが、この語彙は *circu[m]navegação* とハイフンなしの一語で成熟していると考える。よって個人としてはハイフンは使わない。ちなみに白水社版『現代ポルトガル語辞典 三訂版 和ポ付』は *circunavegação* だけを見出しとして掲げる。ハイフンなしの一語で成熟しているかどうかの判断は、個人の感性に従って下せばよく、問題となる語彙に日頃親しんで複合語の感覚がなくなっているならハイフンを取り去ればよい、というのが私の考えだ(新正字法とは相容れぬ考えではあるが、新正字法を意識しつつ編まれた辞書なり参考書なりのあいだですら、同一語彙に関し、綴り上の異見が存在し続けているのだ。正しい綴りが絶対的にヒツツだけ、というあらぬ強迫観念に過剰に囚われる必要はない)。

E-2. 下記の例ではハイフンを省く。

E-2-1. 〈合成・複合〉という概念が失われてしまった合成語については、ハイフンを

省き膠着させる。

manda-chuva > mandachuva

pára-quedas > paraquedas

* ここに挙げた mandachuva にせよ paraquedas にせよ新正字法に関する公式の手引書である *Vocabulário Ortográfico do Português* によると、目下のところ、代替的な綴りとしてハイフンつきの形を認めるのだそうだ。manda-chuva, para-quedas のように。こうした例から明らかであるように新正字法も、ひとたび個別の語彙に立ち入れば、この期に及んでなお“揺れ”の生じているものは少なくなく、一分の隙もなく構築されたシステム、とは到底言えないのだ。

E-2-1. 接頭辞が母音で終わり、かつ第 2 エLEMENTが r または s という子音で始まる場合、ハイフンを省き、そのうえで直後の子音—— r または s ——を重複させる。

anti-reflexo > antirreflexo

auto-suficiência > autosuficiência

contra-relógio > contrarrelógio

Contra-Reforma > Contrarreforma

semi-selvagem > semiselvagem

* 接頭辞→ハイフン→名詞(形容詞)という語彙の構造そのものが、ポルトガル語で全廃されてはならず、一定の条件のもと、新正字法もこの構造を許容しているのに、なぜこのようなややこしいことをするのか理解に苦しむ。個人的には従わないが、autorretrato(自画像)のように、接頭辞の名残りがあっても、すでによく熟した語彙と認めるものについてはハイフンを省き、完全な独立語として扱う(*Dicionário da Língua Portuguesa* 最新版は autorretrato という見出し語のみ掲げる)。独立語としてよく熟しているかどうかの判断は、個々人が下せばよい。スポーツ用語の contra-relógio を contrarelógio とするなど私にとってどうでもいいが、対抗宗教改革を表わす Contra-Reforma を Contrarreforma とせよという決まり、これは訳者にとっての重要語彙であるだけに到底従いかねる。後者における字面の醜さということもあるけれど(r を重ねるのは reforma 語頭の巻き舌音を語中においても保存するため)、この語彙では「対抗」「改革」の双方が重要なELEMENTであり、歴史用語として Contra を大文字で始める以上、断然 Reforma も大文字で始めねばなるまい。それは個人的な意見、と言われれば、そのとおり、と答えるほかないが、語彙の歴史性に対する何らの感受性もないまま、上からの“通達”であるがゆえに盲従するなどという態度よりは、

数段マシと思考する。最後の *semisselvagem* も個人としてはお断わり。

- E-2-2. 接頭辞が母音で終わり、かつ第 2 エLEMENTが、接頭辞最後の母音とは異なる母音で始まる場合、ハイフンを省く。

auto-estrada > *autoestrada*

extra-escolar > *extraescolar*

intra-ósseo > *intraósseo*

* この項目に関しても、ハイフンは最大限除去する、という新正字法の性向が明白なのだが、そもそもなぜそこまでハイフンを毛嫌いするのか。一定の条件のもと、ハイフンを使うというケースを新正字法も認めている以上、この項目に関しても、私としては、ハイフンを取り去るのは日常語として熟しきった語彙のみに限定する。例を挙げれば *autoestrada* (自動車道) がそれだ。後 2 者など、ハイフンを残したほうがよほどわかりよいと思う。課外活動を *atividades extra-escolares* とするか、*a[ct]ividades extraescolares* とするか、は個人の嗜好に委ねればよい(私は前者に与する)。

- E-2-3. 接頭辞が *co-* なら、たとえ第 2 エLEMENTが *o* で始まる場合であっても、ハイフンを省く。

co-administração > *coadministração*

co-ocorrência > *coocorrência*

* どう考えても接頭辞 *co-* と第 2 エLEMENTとをハイフンでつないだほうがわかりやすそうだ。ただし *cooperação* のように独立語として成熟したものはハイフンなしが当然 (*Dicionário da Língua Portuguesa* 最新版は *cooperação* の見出し語のみ掲げる)。

- E-2-4. 前置詞 *de* を伴う動詞 *haver* の活用形に関しては、ハイフンを用いない。

hei-de > *hei de*

hás-de > *hás de*

há-de > *há de*

hão-de > *hão de*

* このケースにおけるハイフンの使用・不使用に関しては、従来、ハイフンを付すのがポルトガル式、ハイフンを付さないのがブラジル式と見なされてきた。拙作の精密な査読にあたってくれた方々はおそらくポルトガル人だし、私としては、ポルトガル式の語法のほうにより深い個人的愛着を覚えはするのだが、当該のハイフンに関する限り、ポルトガル式に付されていたそれに合理性を見出し得ないので、ハイフンを省く新正字法にさほどの抵抗感はない(つまり、旧正字法を無条件に墨守するつもりもないのだが、にもかかわらず、最終的にハイフンを取り去るかどうか、の決断は今もってつきか

ねている)。

F. 小文字と大文字の書き分け (*minúsculas e maiúsculas*)

F-1. 下記の場合は小文字を用いる。

F-1-1. 月と季節を表わす名詞

Janeiro > janeiro

Outubro > outubro

Inverno > inverno

Verão > verão

* この項目に関しては、大文字で始めるのがポルトガル式、小文字で始めるのがブラジル式と見なされてきたのだが、新正字法により結果的には、ブラジル式へ統一される、ということになる。RTP 編 *Acordo Ortográfico: Bom Português* (Porto Editora, s/d) は、使用が *obrigatório* (義務的) となった語彙などと記すのだが、冗談ではない、こんなものどっちでもいいではないか。私個人としては、特に月の名称について、日付の表記にメリハリをつけるため、大文字で始まる綴り——つまり旧来のポルトガル式——を保持する(季節の名称についても同様)。最終的には個人の好みというか美意識の問題に帰すべき選択を、一片の官僚的通達によって、ヒツツに絞り込む必要など断じてあるまい。

どっちでもいいと言えば、国民の呼称がそうで、たとえばポルトガル人は *portugueses* でも *Portugueses* でもよい(前掲 *Acordo Ortográfico: Bom Português*)。私自身は小文字で始めることにしているが、これも個人の好みに任せるべき例の典型である。よろしくないのは、自国民やら好きな国民やらの呼称のみ大文字で書き始め他は小文字で始める(!)、というふうな不統一かつ差別的な表記である。

蛇足ながら、『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語訳において、信徒の告解や司祭の訓戒に見える *Deus*——カトリックの神——は、当然これを大文字で書き始める。さらに *Deus* を代名詞や、代名詞の間接目的格で表わすときも *Ele* や *Lhe* と、文中であっても大文字で始め、そうすることによって、唯一絶対の神に帰依する司祭や信徒の敬神的な心情を代弁する。

F-1-2. 基本方位(東・西・南・北)と中間方位(東北・南西など)

norte, sul, nordeste, sudoeste, etc.

F-1-2 に関する注 1. 基本方位(N, S, E, O)・中間方位(NE, SO, etc)の略語は大文字で記す。

F-1-2 に関する注 2. 基本方位・中間方位を地方名として用いるときは、大文字で始める。例。Vivo no Norte. Ele trabalha no Nordeste.

F-2. 語頭を小文字としても大文字としても、どちらでもよいのは下記の場合である。

F-2-1. 学科や学問の呼称

economia または Economia

matemática または Matemática

F-2-2. 通りや公共的な場所、寺院や建物の呼称

rua da Restauração または Rua da Restauração

torre de Belém または Torre de Belém

* リスボアの目抜き通り Avenida da Liberdade や、最も賑やかな広場 Praça do Rossio など、Avenida や Praça と大文字で始めなければ、それぞれ 3 語からなる固有名詞であることがことがわからなくなってしまうのではなからうか。Serra da Estrela(エストレーラ山塊)や、世界遺産 Torre de Belém(ベレンの塔)についても同様。

F-2-3. 尊重すべき相手や聖人の称号

senhor professor または Senhor Professor

santo António または Santo António

F-2-4. 本のタイトル

Missa do galo または *Missa do Galo*

O crime do padre Amaro または *O Crime do Padre Amaro*

巻末補記

本学の発行するもろもろの学内誌をリハーサルの間として用い累次連載を重ねてきた『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語訳注の刊行が正式に決まった。幾度か言及してきたことだが、厳重な秘密事項に属するはずのカトリックの告白(告解)をその肉声のまま書き留めた書物など、古今のキリスト教世界を俯瞰しても類例は、ほぼ皆無であろうと思う。

ラテン文字により 17 世紀前半の日本語で記されたその稀有な内容を、何よりポルトガルの知識人へ伝えたいという願いから、最大限の丹精を込めて進めてきた仕事を上梓してくれるのは神田小川町の八木書店(古書出版部)である。八木書店は、天理大学附属天理図書館の所蔵する貴重な典籍・文献群を『天理図書館善本叢書』として世に送ってきた書肆であり、2015 年春からは、『日本書紀 乾元本』『播磨国風土記』(いずれも国宝)や、『古語拾遺 嘉禄本・歴仁本』『明月記』(いずれも重要文化財)などの古記録や貴重書を、『新 天理図書館善本叢書』というタイトルのもと、全面カラーで影印刊行しようとしている。

ありがたいことに、1632年ローマで刊行された『コリヤード 懺悔録』も、天理図書館が一本を所蔵しているので、拙作にその影印を収めるという基本的な課題は早々にクリアすることができた。それに際し、影印本刊行の昨今の流れに鑑みて、原著影印はすべてカラー刷りとした。

20世紀前半の戦争・風俗・世相を記録したモノクロ映像を、厳密な考証を施したうえでカラーで甦らせることに、視覚的・心理的観点からいかなる意義があるのか、ある美術評論家が語っているのをETV特集の番組で見たことがあるが、『懺悔録』は美術的価値とはほぼ無縁の古文献だ。文字的内容にアクセスするだけならモノクロで当然用は足りる。が、私自身多少マニアックな美術および書誌愛好者であるので、原色影印は無条件に嬉しいし、いこしえの典籍の息吹を生々しく伝えるため高精細のカラー撮影を利用できるならそれに越したことはない。

タイトルや目次に関する構想もほぼ固まったので下記にそれを掲げる。

『コリヤード 懺悔録(さんげろく)——キリシタン時代日本人信徒の肉声』

Tradução integral portuguesa da obra *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria do frade dominicano Frei Diego Colhado: As vozes vivas dos cristãos japoneses sob a perseguição no primeiro quartel do século XVII.*

* ポルトガル語のサブタイトルは「17世紀第1 四半期における迫害下日本人キリシタン信徒の肉声」とした。

第一部『コリヤード 懺悔録』

PRIMEIRA PARTE. Acerca da obra *NIFFON NO COTOBANI YÓ CONFESION*, (.....) ou *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (.....).

第1章 原著(ローマ、1632年刊。天理大学附属天理図書館所蔵)原色影印

Capítulo I. Facsímile colorido da edição (Roma, 1632) conservada na Biblioteca de Terri, Universidade de Terri

第2章 解題(原著者略伝、『懺悔録』研究小史、原著概要、原著の構成に関する若干の疑問、等)

Capítulo II. Uma biografia resumida do Frei Diego Colhado, O. P., uma pequena história de pesquisa acerca da obra, sumário do seu conteúdo, umas dúvidas relativas à sua composição, etc.

第3章 翻刻および翻字(原著ラテン文字の和文翻刻と、漢字仮名交じり文への翻字)——附、現代和語訳

Capítulo III. Transcrição e fixação do texto original japonês e a sua adaptação para a linguagem moderna japonesa.

第4章 日本語私注

Capítulo IV. Comentários adicionais particulares em idioma japonês.

第 1 節 信仰宣言文に見える「御大切」という語彙をめぐって

§ 1. Uma observação relativa à palavra japonesa «Gotaixet» vista nas manifestações da Fé.

第 2 節 第一誡「御一体のデウスを敬ひ、貴み奉るべし」をめぐるもろもろの告解に対する日本語補説

§ 2. Algumas anotações adicionais em idioma japonês relativas às confissões vistas no primeiro mandamento de Moisés.

第 3 節 第五誡「人を殺すべからず」をめぐるもろもろの告解に対する日本語補説

§ 3. Algumas anotações adicionais em idioma japonês relativas às confissões vistas no quinto mandamento de Moisés.

第 4 節 第六誡「邪淫を犯すべからず」をめぐるもろもろの告解に対する日本語補説

§ 4. Algumas anotações adicionais em idioma japonês relativas às confissões vistas no sexto mandamento de Moisés.

第 5 章 『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注(附, コリヤードによるラテン語訳テキスト翻刻)

Capítulo V. Tradução integral portuguesa da obra *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria do frade dominicano Frei Diego Colhado, acompanhada da transcrição do texto latim por ele elaborado.

第二部 特論および附録

SEGUNDA PARTE. Artigos especiais e Apêndices.

特論 1 高瀬弘一郎「キリシタンと統一権力」[ポルトガル語訳/日本語原文]

Artigo especial 1. Takase Kōichirō, “A Igreja Cristã (Kirishitan) no Japão e os Poderes Unificadores Japoneses nos Séculos XVI e XVII”.

特論 2 高瀬弘一郎「キリシタン布教における“適応”」[ポルトガル語訳/日本語原文]

Artigo especial 2. Takase Kōichirō, “Acerca da «Acomodação» na Missionaçãõ Cristã no Japão”.

特論 3 高瀬弘一郎「16・17 世紀極東におけるイエズス会士の経済活動とキリスト教経済思想——とくにウストラの問題をめぐって」[ポルトガル語訳/日本語原文]

Artigo especial 3. Takase Kōichirō, “Actividades Económicas dos Jesuítas no Extremo

Oriente dos Séculos XVI e XVII: Especialmente em torno da Usura”.

附録 1 日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』関連箇所のポルトガル語抄訳注—
—モーセの十誡ならびに七大罪に関して司祭が信徒へ行なうべき全尋問

Apêndice 1. Tradução parcial portuguesa da obra *SALVATOR MUNDI* ou *CONFESSIONARIUM* (1598) da Companhia de Jesus no Japão: Todas as interrogações a serem feitas pelo Confessor ao Confessado acerca dos dez mandamentos de Moisés e sete pecados mortais.

附録 2 1990 年に採択された「ポルトガル語正字法協定」(新正字法)の概要と、これに
対する多少の異見

Apêndice 2. Uma pequena introdução ao Acordo Ortográfico da Língua Portuguesa assinado em 1990 e umas opiniões pessoais relativas às alterações gráficas causadas pelo dito Acordo.

引用参考文献一覧

Bibliografia

索引

Índice



阪急中津駅のすぐそばに南蛮文化館という魅力的な個人美術館がある。優れた美的鑑識眼を具えた南蛮美術コレクター北村芳郎の蒐集した美術品が、毎年 5 月と 11 月にのみ、ここで一般公開される。北村コレクションの白眉と目されるのが、近年重要文化財に指定された伝狩野派の作品『南蛮人渡来図屏風』(六曲一双、16世紀末から17世紀初)だ。保存状態も極めてよい。

いわゆる南蛮屏風は、モチーフの縁起のよさが商家などの人気を博し、彼らのたび重なる発注が明らかな粗製乱造を招いたのであろう、制作時期が下れば下るほど、一般的には、私の素人眼にもはっきりわかるほど美術作品としての質は低下してゆく。

他方、南蛮文化館蔵『南蛮人渡来図屏風』は、そうした粗悪品とはまったく異次元に属する名品である。その特色としてまず挙げるべきは何より、絵師の豊かな写実的描写力が冴えを見せていること。南蛮人にせよ南蛮船にせよ絵師は、それらをおそらく実地に熟視したうえで絵筆を揮ったものと認められる。

キリシタンの宗教的所作なり営為が幾つか描写されていることも、この作品のユニークな要素だ。たとえば、りっぱな身なりの、やや面長の侍が青畳の日本間で跪き、拳を作って胸を叩いている姿(図版 1)。これは、「ヨーロッパでキリスト教徒は、胸を叩きデウスへ憐みを乞う」(“Em Europa os christãos batendo nos peitos pedimos a Deus misericórdia; [.....]” Luis Frois S. J., *Kulturgegensätze Europa-Japan*

(1585): *Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradicções e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta Provincia de Japão*, ed. Josef Franz Schütte S. J., Tōkyō, Sophia Universität, 1955, p.160) という『フロイス 日欧風習対照覚書』の記事に見えるしぐさと完全に一致するであろうし、同じく青畳の上で武士が、格子越しに黒衣のイエズス会司祭と向き合い、目を伏せつつ何事かを告げるようす(図版 3)は、告解そのものが南蛮屏風に描き留められたまさに唯一無二の作例である。



(図版 1) 南蛮文化館本『南蛮人渡来図屏風』より。「胸を叩きデウスへ憐みを乞う」というヨーロッパ人カトリック信徒の所作を、日本人信徒がそのまま真似ている。黒檀(?)のコンタツ(念珠)も相当りっぱなものである。

拙作の装丁に関しては、告解のシーンが見えるおそらくは唯一の作例であろう南蛮文化館蔵『南蛮人渡来図屏風』をぜひとも利用したいという腹案があったのだが、幸いこれも首尾よく実現できる見通しとなった。



(図版 2) 南蛮文化館本『南蛮人渡来図屏風』より。司祭が日本人信徒から接吻礼を受けているようすも、南蛮文化館本以外にその作例を知らない。ここに見える鼻の高い司祭は、その服装からフランススコ会士と知れる。



(図版 3) 南蛮文化館本『南蛮人渡来図屏風』より。数ある南蛮屏風の中でも、コンヒサン(告解)のシーンが如実に描かれたほとんど唯一の例であると思われる。このように青畳の和室でコンヒサンが行なわれているのもよく実情に即した描写なのであろう。聴罪司祭はその黒衣からイエズス会士であると判る。

南蛮文化館は今、北村氏の息女矢野孝子さんが承継し館長を務めている。2014 年晩秋の某日、私は矢野館長を大阪にお訪ねし、拙作の装丁に上記の重文屏風を利用したいという希望をお伝えすると、幸いにもその場でお許しを頂戴することができた。北村コレクションの真価を正しく理解しうる研究者に対しては、その活動がうまくゆくよう館蔵品に関しありとあらゆる便宜を快く図る、という創設者の崇高なフィロソフィが次代へ確実に引き継がれていると感じ、心強かった。

担当編集者の恋塚嘉氏から、本作は相当なページ数になりそうだという見積もりを示されたとき、ポルトガル語新正字法に関する今回の一文(第二部附録 2)は、その収載を断念せざるを得なくなる可能性を考えた。その場合に備え、2015 年全面施行へ移される *Acordo Ortográfico da Língua Portuguesa* (ポルトガル語正字法協定) への態度というか私見を、上述のとおり簡略ながら披瀝しておく必要を認めた。本篇に記したように *Ortografia Nova* (新正字法) に対しては概ね、否定的もしくは消極的な態度をとるうえ、現にほぼ全面的にポルトガル式の旧正字法にのっとりて葡語文をしたためたのであるから、なおさらであった。